

氏 名	橋 本 祐 樹
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士 (神 学)
学 位 記 番 号	甲神第7号 (文部科学省への報告番号甲第402号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年2月29日
学 位 論 文 題 目	D・ボンヘッファーにおけるキリストとこの世 —「『服従』と『倫理』の間」をめぐる—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 神 田 健 次 (副査) 教 授 土 井 健 司 寺 園 喜 基 (西南学院院長・理事長、九州大学名誉教授)

論 文 内 容 の 要 旨

申請論文は、ボンヘッファー研究史において議論されてきた「『服従』と『倫理』の間」問題を主たる課題とし、これをボンヘッファーのキリスト論とこの世理解の観点から解題することを主眼とする。研究史においては、ボンヘッファーの『服従』(期)と『倫理』(期)をめぐり、特に世理解の変遷・変化に関する議論の中で、両者の間の一貫性が論争され、研究者たちはこれに様々な観点から応答してきたが、本論文では過去の研究成果に批判的に対論しつつ、かつ必要なものについてはそれらを包摂しながら、神学思想的・宣教論的という独自の観点のもと、テキストとコンテクストの連関に留意しつつ研究が進められる。

第1章では、ボンヘッファーの世理解が包括的に概観される。初期のキリスト論的には無媒介の、創造的な枠組みにある世理解は、1932年にキリスト論的に基礎付けられたポジティブな側面に強調の見られる救済論的な世概念に展開し、その後『服従』に代表される時代にはキリスト論的媒介は保持されつつ、ネガティブな側面に徹底して強調が置かれる。世は神に反する罪惡の世として徹底して描かれ、そのような世との関わりは主として隔絶、ないし対立に据えられるのである。後期に入ってはキリスト論的・救済論的な枠組みの中でキリストを通じた和解の世として強調され、そのような世との関係はえてして積極的に、具体的参与の対象として規定される。世理解から見て、「『服従』と『倫理』の間」は確かに存在するのであり、彼の生涯の展開を見ても、「修道院的な」『服従』(期)と政治的抵抗運動に参与する『倫理』(期)との両者の特徴的な差異はその問題性を確かに表明する。

第2章では、「『服従』と『倫理』の間」問題をいかに解題し得るか、その諸相が研究史の成果の批判的包摂を企図しつつ追求された。ひとつには、研究史初期に世捨ての立場だと著しく否定的に評価された『服従』の価値・位置の回復を、当時の歴史的状況に焦点を合わせることで計り、それによって『倫理』への連絡を見出す方向である。ネガティブな世理解の『服従』は、ナチの世、教会闘争のただ中で記されていることを鑑みるならば、それがナチの世に対する神学的・批判的応答であり、非同調主義の政治性さえあることが分かる。世(現実)への明確な応答性がここに示され、『服従』は再評価され、そのことで政治的・この世的な『倫理』との結びつきが見出される。もうひとつの流れは、ボンヘッファーの根本的主題を見出し、その連続的展開を明らかにすることで、『服従』から『倫理』への「間」の一貫性を見出そうとする方向である。ここでは教会論と、そして特にキリスト論に関する研究が取り扱われ、両者がその「間」を包括する主題であることが明らかにされた。

第3章では、『服従』の世理解の広がりやキリスト論との関わりの中で神学思想的に探求される。『服従』の世は、教会にとっての世として、啓示の光の下に、キリスト論的・救済論的に把握される。世は神に反する悪徳と罪惡の世でありながら、キリストによって既に決定的に克服された世と理解され、「今日の」教会が直面する問題としての世は、言わば未だ遺された悪徳と罪惡の世の「影」と見られる。その上で、それは教会と対峙しつつも、キリストから教会に「遺された課題」とされる。「関係」の理解から言えば、この世は教会と「切り離される」、あるいは時に「対抗する」罪惡の世でありながら、それがキリストによって受け入れられ、克服され、いまだなお担われ続けているがゆえに、教会はそこ「において」生きるものとも方向づけられ、あるいはその「ために」歩むものとも示唆された。また、キリスト論的な排他的・点的集中の論理が、内容的に包括的なキリスト論への集中であることから、教会の職域を隣人・社会・この世へと繰り返し批判的に「広く」帰結させていることはとりわけ重要である。疑似ルター主義的二王国論のいよいよ「狭まる」職務理解の現実に対峙しつつ、『服従』の論理の動態の方向は、『倫理』を神学的に眺望させるのである。

第4章は、第3章の研究成果を念頭に据え、キリスト論(的集中)との関わりから『倫理』の世理解を探求する。概念としては『服従』の基本理解と重なりながら、その内容は一点、世をめぐる決定的に、かつ責任的に突き抜ける。キリストが世に來られたことの意味が繰り返し問われつつ、キリストを通じ「神と和解せられた世」に焦点が定められ、そこからキリスト者・教会の、広い意味での積極的なこの世関係がひらかれるのである。『服従』で強調の置かれた世に対する隔絶・距離の理解は「区別」として批判的に修正され、世における教会とキリスト者の責任・使命の位置づけが積極的になされ、悪しき秩序に対する抵抗までが世のための教会の在り方として、キリストへの集中的な思考から描き出されている。継続されるキリスト論的集中は、続けてボンヘッファーを世における歩み、世のための使命に、より積極的に広く、かつ「深く」導いている、と言える。特に後者は、本章後半の研究の成果である。『倫理』諸草稿の執筆年代順序を精緻に解明した新版『倫理』の成果に依りつつ、個々のテキストとそれが記された時代の状況・出来事とが対照され、その意味が考察され、キリスト論的集中の思惟が『服従』のボンヘッファーを世に向けて繰り返し水平次元に「広く」導いたのに対し、その次元は『倫理』で批判的に保持されつつも、かつそれに留まらず、それは『倫理』のボンヘッファーをこの世の具体的な現実・課題のただ中に、徹底的に深く、言わば垂直に導くのである。

ここに、『服従』と『倫理』の間問題に対する本論文の独自の解答をも併せて示すことが出来た。歴史的コンテクストに焦点を合せることにより、『服従』の意味は、世(現実)志向性、政治性の観点から回復され、『倫理』との連絡を指示された。また、ボンヘッファーの包括的主題の解明によって「間」は確かにあの隔絶の感を埋められた。そして、本論文の独自の観点からの研究である第3章と第4章の展開は、先のような外的な仕方の解題ではなく、彼の神学思想の論理・展開から内的に事柄を解題する。すなわち世理解の神学思想の側面では、『倫理』への基本的理解ないし萌芽は『服従』に備えられており、キリスト論的集中の思惟は『服従』から『倫理』にかけて、彼の世理解を連続的・状況的に、かつ「発展的に」導くのである。『服従』は既に世(現実)を明確に、『倫理』に向けて志向している。安易に断絶を見出す解釈は恣意的である。『倫理』は『服従』思想なくして展開されず、『服従』の論理は『倫理』への展開を必然とする。なお、第5章の研究は、得られた研究成果を基礎にそれを発展させ、特に現代におけるボンヘッファー思想の意味と可能性を三つの点から追求する。一つにはボンヘッファーの「保守性」(キリストの現実とその先行性への徹底集中)とラディカルな奉仕論との結びつきについて、次に現代のイエス論をめぐる議論との対話から見出される彼の卑下のキリスト論の意味について、最後にボンヘッファーとエキュメニカル運動との影響史的な関係について、である。

論文審査結果の要旨

以上の内容をもつ申請論文について審査結果を記す。橋本氏の学位申請論文「D・ボンヘッファーにおけるキリストとこの世—『服従』と『倫理』の間—」は、先行研究との批判的な対論を通して、神学思想的・宣教論的な視点を提示し、ボンヘッファーの中期における『服従』と後期における『倫理』の間をめぐり、キリストとこの世の関係を考察した内容であり、学問的に高く評価すべき研究と言える。

本論文は副題にあるように、『服従』と『倫理』の間—」をめぐって、ボンヘッファーの「この世」理解がどのように展開されているのか、また『服従』(期)と『倫理』(期)との関係を如何に理解すれば良いのか、断絶があるとするのか、或いは連続性があるのか、ということを主題としている。全体の構成、論立て、目次の組み立ては当を得ており、また論述は精緻であり、論旨は明確である。E・ファイルや H・ミュラーを初めとする代表的な先行研究とも対話し、これらを乗り越える視点(神学思想的・宣教論的視点)を提示しつつ、ここから「この世」理解を論じている。

序章、第1章、第2章はテーマに対して緊張感をもって接近し、次第に盛り上がりを見せ、第3章と第4章とで本論文の山場をなしている。第5章は現代にも及ぶボンヘッファー神学の射程を示している。『服従』においてキリスト論・教会論との関係でボンヘッファーが「この世」を如何に捉えているか(第3章)、また『倫理』においてボンヘッファーの理解が如何に展開・深化されているか(第4章)、が論じられており、特に本論文で中心を為しているこの第3章と第4章は大変優れている研究成果と言える。

しかしながら申請論文において、考察における問題点がまったくないわけではなく、公開審査の場において審査委員会が申請者と対論を試み、とりわけ考察をめぐってなお考慮すべきと判断するのは以下の三点である。

1. 『倫理』(期)を著書としての『倫理』としてではなく、時期としての『倫理』(期)とするのならば、獄中書簡におけるこれら一連の概念も「この世」理解との関連で論じられるべきではなかろうか。特に、「この世」理解と「成人した世界」・「非宗教的聖書解釈」・「宗教批判」との関連を考察することが、課題として残されているであろう。
2. キリスト者はこの世にありながら、この世からは隔絶して生き、しかしそれゆえにこの世に対して積極的に関与するという考え方は、二世紀から三世紀のキリスト教思想においてしばしば見出される。このような迫害期における古代キリスト教思想をも含め、ボンヘッファーの「この世」理解について思想史的な視点からの研究の必要性が望まれる。
3. ボンヘッファーの教会的背景である古プロイセン合同教会(APU)との関係について、断片的ながら言及されてはいるが、その関係性についての考察が不十分だと言える。特に APU 告白教会はドイツ教会闘争において重要な役割を果たし、ボンヘッファー自身も APU 告白教会の牧師研修所長であったことを考慮すれば、今後の研究が望まれるところである。

しかし以上の諸点は、今後の研究課題と見なしうるものであって、申請論文の価値を損なうものではない。既述のように、申請論文は、ボンヘッファーにおけるキリストとこの世における主題を神学思想的・宣教論的に解明した点にその学問的な価値が存する。序論においては研究史を踏まえて課題と方法論が明示され、全体の論述も明瞭に構成されている。また、本論の各章の論述も説得的に展開され、結論として新たな学問的主張が提示されている。以上により、申請論文について、学位論文としてふさわしいものであるとの判断を審査委員会は下し、その旨ここに報告するものである。